

そして、電話は掛かってきた！

芝田 英昭（福祉学科教員）

私の住んでいるアパートの近くに300メートルほど続く「マロニエ・ロード（栃木の道）」がある。夏の時期は、街路樹の栃の木の大きな葉が、青々と茂り至る所に木陰を作っている。コロナ禍で、運動不足を補おうと週に2回、マロニエ・ロードを抜け柳瀬川沿いに南下して3キロほど歩く様になっている。

今日も、暑い日中にマスクをしてテクテク歩いているが、結構汗をかく。でも、マロニエ・ロードに入ると、木陰の風が頬を撫で汗を拭ってくれる。いい気分だ。その時、スニーカーの音でかき消されそうになっていた携帯電話の着信音に気が付いた。

携帯画面には、娘の名前が表示され、慌てて耳に当てた。

「おー、久しぶりやな。お父さんから掛けるのに」

娘は、「何言うとな、こっちから掛けるばかりやん。仕事で東京まで来たから、埼玉まで寄って、お父さんに会おと思うて。夕方には着くと思うわ。また、肩でも叩いたるな」と、いつもの様に近況報告も含めて陽気に語ってくれた。

娘との何気ない会話は、多忙な日常をいくぶんなりとも和らげてくれるし、私には最も強力な清涼剤だ。

もう夕方までにはそう時間はない、急がなければ。マロニエ・ロードを抜けて市営体育館を正面に見て右折し柳瀬川に架かる志木大橋の「少年像」まで早足で向かった。その像は、身長1mほどで、右手に釣竿を持っている、実に可愛い像だ。

「さて、ここから堤防を左折しよう」と、少年像のある辺を見た。私は、「えー、少年が居ない」と大声をあげてしまった。誰かが盗んだ、いや待てよ、車道の中央分離帯に設置されているから事故にでもあったのか。さまざま考えを巡らせたが、解せない。

目の前が柳瀬川なので、「まさか少年像が川に落ちたのでは」と思いながら欄干からそっと川面を覗いてみた。また、お驚きのあまり声をあげてしまった。「えー、川に河童が、しかも釣りをしている」。目を擦り、もう一度凝視した。確かに河童が釣りをしているし、私の奇声に反応し、緑色の体を反転させて、「イエーイ」と人間の様な声を発して微笑んでいる。そういえば、ここは河童伝承の川だったのだ。河童は、人間に似ているし、笑顔にもなれるんだ、と何故か感心した。

河童を見た証拠に写真を撮ろうと携帯を取り出した途端、携帯が手から離れて川に吸い込まれていった。「あー、携帯ないと、娘からの電話に出られない」と肩を落とした瞬間、頭に軽い衝撃が走った。「痛たたたた〜」、私は地面に頭をしこたま打っていたのだった。信号待ちの車が多いところだから、目を開けるのも恥ずかしかった。そおっと目を開け周りを見渡した。「あれ、ここはアパートや」。頭を打ったのは、地面じゃなくフロリングだった。「えー、夢だったの」と、またまた驚いた。



でも、結構リアルな夢だった。河童の存在を証明する世紀の発見かと思ったが、「確かに、河童がいるはずもないよな〜」と納得した。慌てて携帯を探したら、そばに落ちていた。着信履歴を見た、まだ娘は駅には着いていない様だった。「あー良かった」と胸を撫で下ろしたら、何故かまた睡魔に襲われた。

携帯のアラームで目を覚ました。朝の6時過ぎ。「しまった、うたた寝してそのまま寝入ったのか」。また、携帯の着信履歴を確認したが、娘からの着信は、存在しなかった。

そうだ、娘は15年前に亡くなったのだから。

最近、娘と話す夢を頻繁に見る。いつもの様に夢を思い出してみるが、娘が言っていたように確かに私から電話を掛けることは無いのかもしれない。だって、「私は、亡娘のあの世の携帯番号を知らない」のだから。

そう、今度は、紙に携帯番号をメモしよう。いや待てよ、メモした紙も夢から覚めたら霧散すのだろう。じゃ、肩を叩いてもらうところまで夢で見よう。

研究休暇取得への謝辞：

2020年度秋学期研究休暇を頂きましたこと、この場を借りて感謝申し上げます。その間の研究成果は、芝田英昭（編著）『検証：介護保険施行20年—介護保障は達成できたのか』（自治体研究社、2020年12月）、芝田英昭（単著）『くらしと社会保障』（日本医療福祉生活協同組合連合会、2021年9月）として社会還元させていただきましたので、お暇な折にご笑覧下さい。